

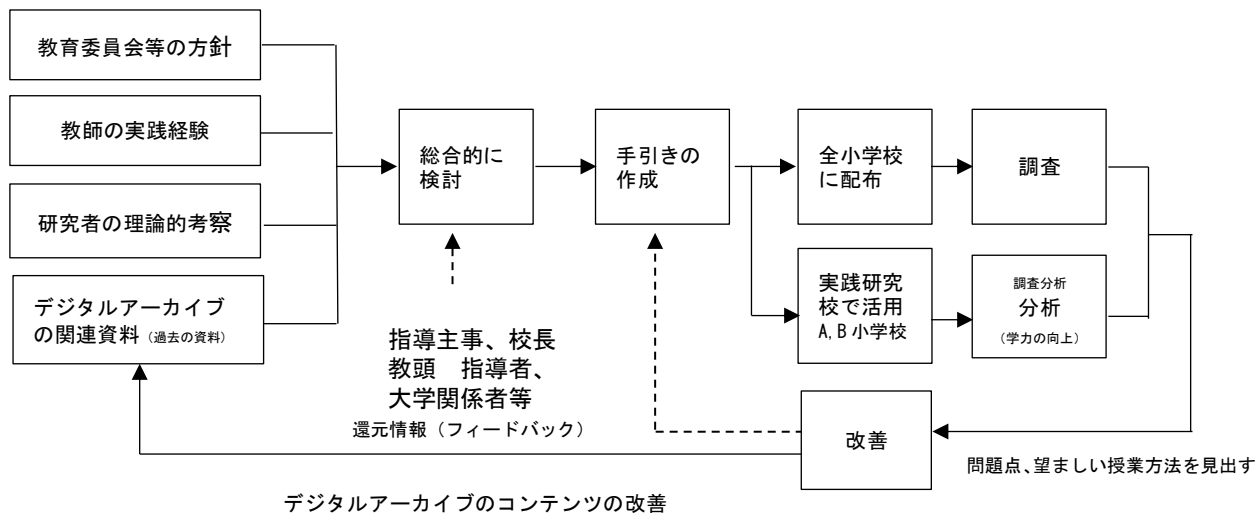
デジタルアーカイブを用いた学習指導の新しい方法を用いて

～発問を事例として手引きを考える～

長尾 順子(恩納小学校 校長)、眞喜志 悦子、佐々木 恵理、加治工 尚子 (岐阜女子大学)

(1) 発問を事例としてデジタルアーカイブと関係資料で手引きを作り改善

デジタルアーカイブを用いて発問についての各種資料と教育委員会等の指導方針、研究者の理論的考察、実践者の経験等を分析し総合的にまとめて手引き書を作成した。この手引き書を実践研究校や沖縄の全小学校等に配布した。この実践結果の報告や利用者(教師)の調査結果をもとに改善した。その構成は次のようである。



(2) 教育委員会等の方針と教師の経験情報の収集

①教育委員会では、発問の指導方針の手引きが作られていて、これを参考にした。

②教師の経験等(実践の報告)

長尾が中心になり、公益財団法人博報児童教育振興会「第9回 児童教育実践についての研究助成事業」(代表:長尾順子指導主事)(2014)の支援を得て、小学校1年生から小学校6年生を指導する教師でシンポジウム、研究会等を実施した。これらを「言葉の力と考える力を育てる発問・発言と学習プリントの手引き」にまとめ報告した。(発問、確認、言語指導等について研究)

③研究者の論文等、McGillの質問、応答の仮説

この仮説によると、発問～（受け止める）、（考える、課題解決）、（決定行動）で応答時間が示されている。指導活動でのこの意味するところを理解し、指導方法について考察した。

④デジタルアーカイブの解析結果

発問と応答時間について、1967～1970年のデータがあり、これらを用いて応答時間を考察した。

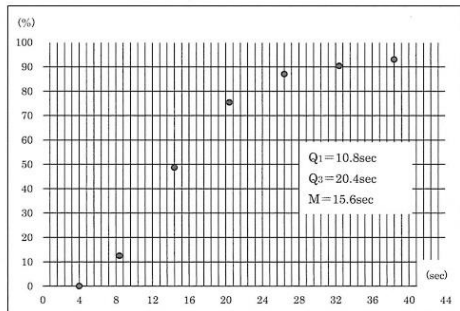


図1-3-3 教師の発問(簡単な思考を要する)に対する反応時間の分布

注1) 廣瀬(1971)を中心に岐阜大学の廣瀬・後藤・森・成瀬らが行った「集団反応曲線(ロット)評価のためのparameter (I-6小学校・探査p36)」TM研究、第7報p36を基に作成

最初に分かった時間

発問	Q 1	Q 2	Q 3
小学校	10 秒	14 秒	20 秒
高校	10 秒	14 秒	20 秒

発問と確認の反応時間の違い

小学校	Q 1	Q 2	Q 3
確認	4 秒	8 秒	14 秒
発問	10 秒	14 秒	20 秒

(3) 手引き書

(2) で紹介した各資料を総合的にまとめ、次のような手引き書を作成した。

長尾が中心になり、現職の先生、大学院生と共同し、発問事例や実践について話し合い、1つの手引きにまとめた。これに対し、博報堂の支援を得て、手引き書の冊子を県内全校に提供された。

- ・A 小学校は、この中から繰り返し学習について参考にして、指導方法を考え学校全体(1年～6年)で実践
- ・B 小学校は、全項目を教頭先生が説明、具体的な指導実践を見せ、学校全体で実践



手引きの一部

(4) 教師に対する調査

作成した手引き書を県内全校に提供し、教師からその実践結果の報告を受け、整理して改善を進めた。(次のような課題が出た)

- 〔課題1〕50年前の学習反応データを現在使ってよいだろうか。・・・人の反応は社会の変化に対して変わるか
- 〔課題2〕調査した結果を「手引き」の改善にどのような方法で使うか(改善の方法、組織)
- 〔課題3〕デジタルアーカイブの還元情報として各デジタルコンテンツにどのようにフィードバックし改善するか(PDCAサイクルの構成)
- 〔課題4〕改善結果をどのように教員にフィードバックするか